

平成30年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻3月号(通巻704号)

風土



3

こけし 売る すり 膝 尼の 涼しさよ

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

この句は「東慶寺」の前書きがあります。鎌倉の東慶寺は臨済宗の古刹で、「英勝寺」という尼寺もあります。その尼さんたちの様子を詠んだもので、手すさびに作った「こけし」を希望があれば拝観者に売っていたようです。おそらく庫裡の縁あたりに「こけし」を並べているのでしょう。買いたい人が現れたので、畳を「すり膝」で近づいたのです。その所作に思わず「涼しさ」を感じ取りました。「すり膝尼」という措辞は桂郎師独特のもので

見えぬ 黴 坐して ほとりへ 漂はす

(句集『高蘆』より昭和四十三年作)

これは梅雨時の「七畳小屋」を詠んだものです。竹藪の中の、壁が隙間だらけの小屋です。湿気は生半可ではありません。いたるところに黴がはびこります。座布団にも「見えぬ黴」が付着しているのです。坐ったとたんにかび臭い匂いが浮遊し始めました。「ほとりへ漂はす」に梅雨に辟易する桂郎師がいます。

いのちまた燃ゆる色なり初明り

(句集『心後』より平成四年作)

「初明り」は元日の朝、東の空にほのぼのとさしてくる曙光で、一年の始まりの明りです。冷気の中のその曙光に器師は「いのちまた燃ゆる色」を見ているのです。すべての命の根源は太陽が育んだものです。地球の命の始原まで意識を遡らせ「初明り」を反芻しています。ちなみに桂郎師に「初明りもとより障子明りなす」(句集『四温』)があります。この師弟の「初明り」の捉え方の違いが垣間見えて興味を覚えます。

ふるさとやキリストのごと田螺ゐて

(句集『心後』より平成四年作)

器師の実家は鶴川の農家です。桂郎師の暮らしたところでもあり、たびたび訪れています。田の溝をよく見ると「田螺」がいます。じっと見入るうちに、器師はなんと「田螺」を「キリスト」に喩えました。おそらくその形態からではなく、「ふるさと」のやさしさや包容力の象徴として「キリスト」が浮かんだのです。

初

曆

南
う
み
を

薄き日を吸ひ尽くさんと冬紅葉

枯草をころがるヌードルのカップ

川涸れて骨の自転車骨の傘

田の氷ペットボトルの腰を抱き

白菜のおのれを締むる霜夜かな

落葉踏む偲ぶこころをはぐくみつ

冬至の日葎の雀弾き出す

百枚の畳のひかる寒さかな

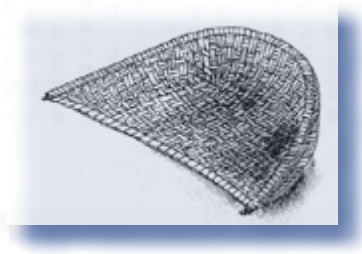
、
F氏を訪ふ

もてなしの色を暖炉の桜櫓

餅搗くと臼に蕙を噛ませけり

煤梁に届かんばかり餅の杵

水鳥の日差しにひらく初暦



竹間集

同人作品



小春日

田村すゝむ

片意地は越後生まれぞ冬に入る
小春日や退屈と云ふ午後三時
小春日の南無妙法の鯛ノ浦
「あ、雪が」詩よむ老いの一人言
京都將軍平大舞台にて
冬夕焼白き京都を手の内
利休居士の四百年忌雪椿
大枯野見えぬ余生へ歩を進め

聖夜

田中佐知子

平飼の卵のぬくみ聖夜来る
ペットショップの子犬買はれてゆく聖夜
シヨウインドウの赤いポルシェやクリスマス
降誕祭木立に透ける街灯
荒野来る灯の煌々と聖夜かな
クリスマス満艦飾の海暗し
搭乗を待つラウンジの聖樹かな

冬紅葉

中村 洋子

大炊殿下賀茂神社に火の神祀る十二月
銀沙灘銀閣寺二句を大海に見つ冬の月
義政のお茶の井跡や片時雨
山門法隆寺二句は額縁となる冬紅葉
冬芽持つ谷崎の墓空くうと寂
走り根の洞に嵩足す散紅葉
湯豆腐の湯気の向かうに南禅寺

雪 蛩

橋添やよひ

禪庭の石の眩き雪ばんば
拈華微笑迦葉に障子明かりかな
吹き寄せの菓子に手が出る漱石忌
立ち食ひの討ち入り蕎麦に舌を焼き
身のうちの喪が抜けきらず十二月
馴れるとはあきらめること葱きざむ
白砂盛る 向月台や冬の星

ばれ太鼓

浅田 光代

流さるることの寧けさ浮寝鳥
「大根だき券」買って善女となりにけり
水鳥の一羽一羽を日の囀ふ
枯野へと小さき土橋わたりけり
忘年の一句まはして箸袋
年送る繁昌亭のばれ太鼓
赤きものほのと浮きたる味噌雑煮

白

柿沼 盟子

寝かせ置く大根白き夜の厨
狐火や泉の奥に洞ありて
鈍色の空に白き日鎌鼬
沈みをる露地の飛び石霜柱
笹鳴きや小店に求む書画の額
伽羅御所の跡に二重の干し大根
張り詰めし朝に白き冬椿

福沸し

高村 令子

仕舞湯へ亡母と亡父来て去年今年
峽に古る初日まみれの父祖の家
あるがまま生きて卒寿や福寿草
初日受く死ぬまで同じ山背負ひ
ただよひて生きる晩年齋粥
寝落ちゆく嬰は宝物福沸し
前向きにと先づは一筆初日記

山河集

同人作品



南うみを選

刀鍛冶一打の閃光冴えまさり

大森 尚子

焼刃土一粒の冴え刃紋呼ぶ
冬天へ大槌小槌の間合ひかな
関鍛冶の鼻緒の瘦せる師走かな
山 眠る 鞆 操る 左 腕

袖通す白衣の折り目去年今年

石井美智子

なまはげの荒ぶる午夜の村明り
なまはげの出刃持ち替へて御神酒汲む
なまはげの去りしところに福の藁
夜を走る裸参りの藁草履

十二月柱時計を掛け直す

布施まきこ

硝子戸の中の日射しや漱石忌
追ひかけて追ひかけられて落葉道

櫛落葉空の高さを楽しめり

書の流儀展

貫之のかな書に出合ふ小六月

鷗外と慶応三年生まれの文人達」展 三句

冬ぬくし鷗外の大き選句文字

鷗外宛子規のはがきに春待つ句

鷗外宛漱石の書簡暖炉燃ゆ

鷗外の詩碑と冬日にぬくみけり

亡き姉の古き英字書漱石忌

池田 光子

どの指も元気勤労感謝の日
高野豆腐軽くしげれば寒波くる

年の市 二句

裸木に吊る掛軸は富士の山

風土独語／南 うみを



道元は道を語らず冬落暉

山田 健太

この句の読みのポイントは「道を語らず」です。例えば親鸞の「浄土真宗」の念仏の伝道布教に比べれば解るでしょう。道元は座禅によって直接悟りを体得することをすすめました。道は白すから拓くものなのです。「冬落暉」の冷たい輝きが道元の禅を象徴しています。格のある句です。

関鍛冶の鼻緒の瘦せる師走かな

大森 尚子

「関」は鎌倉時代から今に続く鍛冶の町です。作者は鍛冶の様子を目の当たりにし「鼻緒の瘦せる」という言葉を掴まえました。足指に力を入れて刃がねを仕上げる様子がまざと伝わります。読み手をうまく想像の世界に誘導しています。

なまはげの出力持ち替へて御神酒汲む

石井美智子

この「なまはげ」の鬼は、訪れた家の主から御神酒をふるまわれているところです。「酌む」ではなく「汲む」に、樽から柄杓で汲む鬼の荒々しい所作が想像できます。「汲む」が的確です。

短日や足より暮るるバスのりば

岡 尚

「短日」は暮れが早い。作者はそれを足元に感じています。足元から這い上がる闇に心細さを覚えていきます。足元に焦点を合わせること、作者の心情が伝わってきます。

櫻落葉空の高さを楽しめり

布施まさ子

この句は「櫻」に焦点を当てたことで成功しました。まずは「櫻」の高さ、次にその葉が日差しにきらめきながら落ちて来る様子を「空の高さを楽しめり」と置いたのです。

半島の日の足早し掛大根

片桐紀美子

「日の足」は雲間からもれる日光のことです。近景に「掛大根」を置き、そこから退く「日の足」を描きました。すでに「日の足」は半島の鼻の辺りです。なつかしい景色です。

鷗外宛て子規のはがきに春待つ句

仙田 孝子

この句には「鷗外と慶応三年生まれの文人達展」という前書きがあります。子規は慶応三年です。このころの文人達は小説も短歌も俳句も同列に書き、交わりました。その交わり的一端が「子規のはがき」です。「春待つ句」が子規の病を暗示しています。

飴色のどんぐり拾ふ良弁忌

上辻 蒼人

東大寺二月堂の「お水取」、若狭の「お水送り」と深い関わりのある良弁大僧正の忌日は陰暦十一月十六日です。東大寺の辺りでしょうか。ふと風雨にさらされた「どんぐり」を拾い、その飴色に良弁の偉業を想い起したのです。

風土集



南うみを選

道元は道を語らず冬落暉 水戸 山田 健太

死神の張り付いてゐる日向ぼこ

鷹の羽根郵便受けの中にある

熱爛や握り拳の中は海

たま風に追ひ落とされし面袍かな

短日や足より暮るるバスのりば

夕映えて総門山門冬紅葉

わらぼつち並ぶ里山冬ぬくし

風呂吹に戸締まり早き夕べかな

頬杖を解きて腕組む漱石忌

半島の日の足早し懸大根

枇杷の花かをる裏木戸開けにけり

牡蠣割女時をり海を見てをりぬ

ひとしきり鳥のざわめき落葉山

泥のまま投げ渡さるる蓮根掘り

相模原

岡 尚

平塚

片桐紀美子

豆稲架を残して宇陀の日暮れかな 五條 上辻 蒼人

飴色のどんぐり拾ふ良弁忌

櫟檜里山に冬走り来る

雨ぐせの宇陀の郡の冬紅葉

朴落葉鉛の葉裏翻し

目鼻なきマネキン師走の飾り窓 東京 川田 好子

音高き庖丁さばき日短

風に鳴る玻璃くもらせて根深汁

放たれし言葉かへらず冬の月

咳込みてひとりの闇をおどろかす

新巻の鮭吊るさるる上野駅 京都 杉本葉王子

佗助や少女の口の少し開き

霜柱ザクザクと踏み出勤す

ポインセチアここは青山一丁目

冬菊の温もりのある寂しさよ